

一山一家の末裔

松本 幸子

昭和二十年代の初めの頃、じっちゃんのことやま小炭砒の長屋には五十人程の坑夫達が暮っていた。長屋は六軒長屋とかハーモニカ長屋と言われていた。

六軒長屋とは長屋一軒を六つに区切っており、六畳二間の広さだ。じっちゃんの長屋は一軒を四つに区切っており、大きな炭砒とは造りが違っていた。

基本的に坑夫達は坑口近くに住んでいた。何事かあればすぐ駆けつけることができた。これが一山一家の形態である。

水道料金、電気料金、風呂の経費、便所整備、長屋の修理費、すべて一家の主が支払う。風呂、水道、便所（トイレとは言わなかった）等共同使用である。当番制ですべて清潔を保つよう、責任者がいた。

共同水道は六畳一間にすっぽり入るくらいの立方体をセメントで作り貯水槽とした。貯水槽の四側面に、大人の腰ぐらいのところに蛇口を取りつけ、その下に板で傾斜をつけ洗い場とした。洗い水は傾斜に添って側溝へ流れる。鍋や飯釜、米、野菜、魚の下ごしらえ等、ここで仕上げて家の台所へ持ち込む。

私は必然的にそこでの魚の扱い方や、米の研ぎ方、水加減、黒くなった鍋底の磨き方を覚えた。秋の終りの白菜の漬け方もそこで覚えた。たまに坑夫のおんちゃんが干し物竿にあんこうを吊るして皮を剥いでいるのを見て、恐くなり逃げ出したことがある。

味噌や醤油を貸し借りした。

「マンマ一膳ねえげ。」と壁越しに言うこともある。遠くの親戚より近くの他人で、親戚以上の付き合いである。

風呂は八畳ぐらいの天上の高い部屋に木の浴槽を取りつけ、洗い場はセメント製だ。洗い場のセメントに石けんを塗れば、固定された足のかかと洗いに最適だ。浴槽の内側、外側に板で階段を付けてある。子供、年配者には都合がよい。それに腰かけてゆっくりする者もいた。

坑夫達は粉塵で汚れた顔で帰ってくると、着替えを持って風呂に行く。五、六人ぐらいつつ交替で入ると、風呂の湯は汚れてくるし、湯量も減る。

「おばちゃんよ、どんどん湯沸かしてくれや。石炭は売るほどあんだからよ。」と大きな声で専従のおばちゃんに言う。

「あいよ。もう少しだから待ってておくれ。」と、たしなめるように言う。おばあちゃんは坑夫の背中 of 大きな彫物等ちつとも恐がらない。流れ坑夫は気が荒いと言われるが心根は優しい。

子供達はあの背の高い坑夫の背中 of 龍にいつ触れるか、虎視眈々としていた。この長屋で一番のガキ大将（小学六年生）が、ある日の風呂の中で突然坑夫の背中の龍に平手打ちをした。一緒にいた子供達はびっくりして成り行きを見守った。

「この野郎、何すんだ。オレはおっかねえ（恐い）んだぞ。」といいながらガキ大将を湯舟からつまみ出した。しかし「ウワァ、ハッハッハァ」と坑夫は笑った。ガキ大将も龍に触れた嬉しさのあまり胸毛までなでた。他の坑夫達もその様子を見て、和んだ。その日の疲れが吹き飛んでいったような、さわやかな風呂上りとなった。家の間取りは履き物を脱ぐ玄関（上がり框）が半畳分で床下には石炭（暖房、煮炊き用）焚き付け用杉っ葉、薪が備蓄してある。食器棚、小さな流し場が隣にある。共同水道なので流しは小さい。

次は一家団欒の部屋で六畳だ。卓袱台をかこんでの食事、お茶、子供の勉強、ラジオもある。次が寝室で六畳だ。子供が増えると事務所にかけあい、簡単な建増しをしてもらう。こやま小炭砒ならではの利点で、専従の棟梁がやってくれた。

坑夫達はやま炭砒専用の販売所で生活用品のほぼすべてが買えた。それは通帳買とって給料日に差引かれた。

石炭一函（トロッコ一台）なんぼの時代だ。米は米穀通帳で販売量が定められていた。家族が多いところでは、近隣の農家から少し割高のヤミ米を買っていた。

子供が学校を卒業して他県に就職する時は移動証明が必要であり、米穀通帳も書き換えを要した。

「じっちさん、大変だ。博の顔がぶんず（青く）になっちゃった。」と靖が本家に駆け込んだ。じっちさんは日課になっているこやま小炭砒の事務所に行くために、三ツ組みの服とニツカズボンをはき、少なくなった白髪に柳屋ポマードをビシッと塗り、ステッキを右手に持ったところであった。

「なんしゃ（どうして）騒いでいる。」とライオンの風貌になった。

「大変なんだよ。じっちさん医者様呼んでよ。博んちでゼニ無えって。死んじまう

よ。」じっちゃんさんはピカピカのこげ茶の靴を脱いで、ストーブの脇の机の上の電話に手をかけた。

「靖、土橋は何番だ。」

靖は壁に貼ってある電話番号表をさがした。

「〇〇番だよ。」

「ああ、土橋先生かい。すぐ来てもらいてえんだが。オレんとこのガキがハアハアしてるんだが。」

オレんとこのところと言ったが子でも孫でもない。自分のところの従業員の子供であった。

自転車で五分くらいのところに小さな医院を開業している土橋先生がきた。とても細身だ。

「少し痩せの方が身体が軽いわ。」とじっちゃんの前で平気で言う。

「先生はろくな物食ってねえんでしょ。」と憎まれ口を叩く。先生の自転車はタイヤが古くなってパンクしそうだし、往診用靴は皮に何本も横筋が目立ちくたびれていた。

看取りは抜群によいという世間の評判だった。博はあけびを食いすぎて腹が痛くなった。食糧難の時代だった。先生が浣腸したとたん博は元氣を取り戻した。

「オラア、スツキリしたあ。」と言いながらじっちゃんの家から出て行った。

「早めにえ家さけ帰えれよ。」とじっちゃんは博の後から怒鳴った。怒ったのではない。

じっちゃんはマスばっばさんに土橋先生にお金を払ってくるように言い残し、事務所に出かけた。土橋先生は浣腸ぐらいで博の家から金をもらえないと思っていたが、マスばっばさんが届けてくれたので感謝した。

いつもどてら襦袢姿でストーブの火を見つめながら、いかにしたら出炭量が増えるか、坑内事故にあわないようにするか考えていたであろうじっちゃんこそ父方の私の祖父であり、三十九歳の若さで坑内の出水事故で急逝した坑長こそ我が父親である。

本州最大の常磐炭田地帯の露頭炭を発見し、笠間藩の人間でありながら湯長谷藩の許可を得、開坑にまでこぎつけた男、片寄平蔵と我が父の生きざまが、我が心の抛り所である。

松本 幸子
(まづもと さちこ)

六十七歳 (昭和二十一年生まれ)
福島県いわき市在住
いわき市の「吉野せい賞」の奨励賞を、「ズリ山に咲く赤い花」にて
受賞